

## 武器としての実用性に乏しかった日本刀

(文献より抜粋した資料より記述)

作成 竹花充章

戦国時代には、さまざまな武器が用いられました。それらのうち、戦場に持ち出された数をもっとも多かったのは、間違いなく刀で、もっとも、刀にもいろいろありますが、この時代には、刃を上に向けて腰に差す打刀形式のものが一般的になっていました。

大小の日本刀を差す風も定着しつつありましたが、それ以上の本数を携えてゆく者も少なくなかったから、戦闘に参加した人数の何倍もの刀剣類が用意されたこととなります。戦闘員だけではなく、後方要員のような非戦闘員も、刀だけは差していたから、ますます絶対数は大きくなる。武士階級に限らず、当時の日本の男たちがほぼ一様に刀を帯びていたことは、来日していた宣教師たちも報告しています。しかし、戦場に刀がたくさん持ち出されたということと、戦闘における有効性が高かったかどうかということは、明らかに別の問題であります。そのことは、戦闘に加わった者がどういう武器で傷つけられたかを見れば、容易に証明できます。この時代には、戦闘報告書など一応信頼できそうな史料で、本人や部下たちの負傷の状況を記したものがかなり残されていてそれらから負傷原因のはっきりしているものを拾い出して統計を取って見れば、武器としての刀の位置づけがはっきりしてきます。戦国時代の始まりとされる応仁の乱から、島原の乱までの史料から拾った資料によりますと、おおそよですが負傷原因を多い順に並べると、鉄砲22%、矢疵20%、槍疵20%、石・火疵10%。刀傷などはわずか5%、その他薙刀疵などと合わせてみても約80%程にしかならない。刀剣類で負傷した人は、槍・鉄砲はもちろん、高いところから石を落とされたり、投石を受けたりして負傷した人よりも、まだ少ないのです。これは、日本刀こそ、わが国の伝統を背負った代表的な武器であったと信じている人たちには、いささかショッキングな数字かもしれない。そのためか、かつて、こうした統計を示したところ、刀でやられると致死率が高いから、負傷者としては出にくいのだという意見もありましょうが！。しかし、甲冑の厚門家によると、刀では金属製の鎧はもちろん、革鎧を切ることも難しいそうでありまして、居合抜刀道の試斬を少々やっている現代のサムライ諸氏の体験からも十分理解できるものです。映画やテレビドラマの戦国合戦の場面というわかり易い映像にてやや謝った理解をしています。戦場での武器としての刀の殺傷力は、きわめて低いのです。

刀はなぜ戦闘の役に立たなかったのか

刀があまり戦闘の役に立たなかったのは、そもそも、この時代の戦闘が遠戦つまり敵と離れて戦うことを主体に行われていたことも背景にあります。先の統計でも明らかなように、弓、鉄砲、石火傷者を合わせてみれば、52%以上に及んでいる。これでは、白兵（刀や槍のような刃のついた武器）の出番が乏しくなるのは、当然であります。

これは戦国時代になって始まったことではなく、それ以前からの傾向でありまして、鎌倉末期から南北朝時代、つまり楠木正成や足利尊氏の活躍していた時代などは、もっとはっきりしていて、同様の統計を取ってみると、矢疵が86%、石・火疵が1%であるから、九割近くが遠戦兵器でやられていることになる。それより前の時代については、統計を取ってみることはできませんが、文献によつてたどる限り、明らかに主武器は矢であつて、刀剣類は補助的に用いられていたに過ぎないと思われまふ。要するに、わが国では、戦場における白兵の役割は、一貫して低かつたのであります、**やはり飛び道具の威力が大きいのは実感的にも理解できる内容と思ひます。**白兵を用いて戦うことが戦闘の基本であるとか、それによつてのみ戦闘に決着を付けることができるといった考え方（これを「白兵主義」という）は、文献資料から見ると、どの時代においても希薄であつたのです。戦国時代になつても、弓矢は大きな役割を果たしたが、この時代の後半になると、鉄砲が導入されて、次第に肩代わりされるようになりまふ。さきの統計では、鉄砲疵の比率が低すぎるように感じた方もおられるかもしれないが、鉄砲疵というもので、史料に登場（鉄砲伝来から信長の時代）した以後の戦いだけを切り離して計算してみれば、43%にも及んでいる。もちろん、この時代にも白兵による戦闘が行われなかつたわけではないし、槍疵を負つた者がいなかつたわけではなく、その時代でも槍痕を負つた者が20%いるという事実が示している、刃物の傷で槍傷は変わらないと言ふこと。それにもかかわらず、刀による負傷はるかに少ないのは、接戦になつた場合いには、槍は役に立たなかつたからであります。なによりも槍を持つた相手に普通の刀で立ち向かうことは、まず無理です、勝ち目はありませぬ（武道の常識）、そのことを裏付けるような話は、数多く残されています。この時代の槍というものは、敵を突くというよりも、振り阿して叩き倒すために用いられることの方が多かつた。これではますます刀に勝ちはない。ちなみに通常の刀の親類に、柄や刀身をことさら長くつくつた長巻とか野太刀といったものがあるが、これらの用途は、相手をなぎ倒すことの方に力点があつたが、飛び道具はもちろん、槍にもかなわないとでしう。戦場にて白兵戦にて敵兵をもつとも倒すのに有効だつたのは鎧通しだつたと思われまふ、倒れた敵兵をバックストップした状態で短剣で突き刺せば強固な鎧も貫通したことでしう。刺すことが（斬るでなく）有効な手段だつたと思われまふ。

こうしたハンディに加えて、日本刀には構造上の問題もあった。なにしろ刀身は折れ曲がりやすかったし、その刀身を別に作った柄に差し込み、目釘でとめるという方式にも強度の点で欠陥があります（抜刀やればすぐにでもわかります）。また、手入れもけっこう面倒であった。日本刀というのは、さまぎまの意味で武器としては実用性に問題のあるものだったのです。

ここまで読まれた方は、そんなに問題のある武器が、なぜあんなに大量に持ち出されたのかという疑問をお持ちになったかもしれない。一つは、護身用あるいは補助的な武器としての必要性であります。槍・薙刀などを取って戦っていた者がそれらを失った場合、何もないというのでは困る。また、不意に敵に襲われた場合とか、室内などで狭い場所で戦わざるをえなくなった場合には、刀のほうが有効ということが考えられる。また、この時代には、海上での戦闘は余り行われなくなっていたが、そうなった場の船上では槍・薙刀などの長物にくらべて、刀は使いやすい武器であった。現代戦でも兵士の多くは腰に拳銃を所持している、道具は壊れるのです丸腰ではあまりにも寂しい！。もう一つは、戦闘のためではなく、「首取り」のための必要性であります。この時代の武士たちにとって、敵の首を取ることは手柄の代名詞のようなものであり、首と言っても、正々堂々と渡り合って取るとは限らない。そんなのは、むしろ例外で、負傷して動けなくなった者や戦意を失って逃げる者の首を取る方が圧倒的に多かったでしょう。この時代の戦死者というのは、即死者ではなく、そういう形で首を申られた者が過半を占めたはずであります。 いずれにしても、敵の首を切り取るためには、刀剣類が不可欠であり、それには通常の大刀や小刀が用いられることもあったが、首取り専用のような寸延びの短刀等がありました。また、首を取ったり取られたりするのには、戦闘員とは限らず、非戦闘員も多かった。被らぐ帯刀していたのは、自分たちが首取りを実行したり、それを防いだりするためでもあった。首取りに用いられた刀の数は、戦闘に用いられたものより、はるかに多い。たとえば、大阪落城のとき、徳川軍の取った首は、記帳されたものだけで 14000 くらいとのこと。一人で複数取った者もいるから、同数の短刀が使われたとは言えないが、短刀は必需品であったわけです。戦国時代における刀（打刀）の役割は、掛け値のないところ、たいした役割はしてこなかったのです。ここまで述べたようなものでありますが、後世になると、日本刀こそ、有効な武器であるという考え方が現れだして、これは江戸時代の後期になって、実戦の経験が忘れられてから生まれたもので、戦国時代には、そんなことを考えた者は誰もいなかった。

こうした刀を絶対視する論は、幕末の攘夷論者などが好んだところですが、外国艦隊の砲火を浴びると、たちまち消し飛んでしまった。NHK「八重の桜」

でよく表現されています。さらに戊辰戦争の体験を経るに及んで、日本刀で洋式銃に対抗できるなどと考える者はいなくなりました。それで終わればよかったのですが、日露戦争が終わった後、日本陸軍は、突然、日本刀を装備として持ち出し（白兵主義）、太平洋戦争へと突入していった。織田信長が聞いたらさぞビックリしたであらうでしょう。日本刀では戦に勝てないのは戦国時代では常識だったことでしょう、それを忘れては、勝てないですね！ほんと。

注) 白兵はウィキペディアを参照してください。

## 信仰の対象としての刀

刀剣は武器として発達しますが（日本刀 1000 年の歴史）、もっと長い歴史（地球上の・・・）の中でもこれほどまでに大切に扱われた国は、我が国において他にないと思われます。

「三種の神器」に剣があるように、武器として実用に供されることなく、御神体・御神宝として祀られており、戦勝や武運長久などを祈願して神社仏閣に刀剣を奉納するなど、宗教的風習は古くから行われてきました。

また、刀剣は「武士の魂」といわれ、武器としてだけでなく美術的にも優れたものが求められ、家宝として、また、権威の象徴として大切に扱われてきました。一般の家庭でも死者の枕元に「守り刀」として供えられるなど、人々の精神生活とも深い係わりを持ってきました。

サムライにとって武士道では刀は美しくなければ許せなかったのです、その顕著な礼は懐剣と言われる短刀（憎き親、兄弟の敵を討つ道具）です、西洋の短剣のように三角形の両刃の姿ではありません、西洋の短剣の姿のほうが殺すには有効なのは承知のことでしたが我が国の短刀はそのような姿をしていません、良く見て、意識をもって鑑賞してください。

## 象徴としての刀

新渡戸稲造先生は、いかに刀を重視していたかを語り、「象徴としての刀」の存在を説明している。

「刀は武士の魂十五歳にして成年に達し、行動の自由を許さるる時に至れば、いかなる業にも用うるに足る鋭利なる刀の所有を誇りうる。この兇器の所有そのものが、彼に自尊ならびに責任の感情と態度を賦与する。「刀は伊達にささぬ」。彼が帯におぶるものは心におぶるもの——忠義と名誉の象徴である。大小二本の刀、太刀小刀、もしくは刀脇差と呼ぶる刀は決して彼の身边を離れず、家にありては書斎客間のもっとも目につきやすき場所を飾り、夜は容易に手の届く所に置かれて彼の枕頭を守る。刀は不断の伴侶として愛せられ、固有の呼び名を付けて愛称せられ、尊敬のあまりほとんど崇拜せられるに至る。史学の

祖（註…ヘロドトス、～紀元前420年以前）はスキュタイ人が鉄のえん月刀に犠牲（いけにえ）を捧げたことを一の奇聞として録しているが、日本では多くの神社ならびに多くの家庭において、刀をば礼拝の対象として蔵している。もったもありふれた短刀に対しても、適當の尊敬を払うを要した。刀に対する侮辱は持ち主に対する侮辱と同視せられた。床に置ける刀を不注意に跨ぎし者は禍（わざわい）なるかな！」

象徴としてでなく武器として使用する時の心構えについては、武士道は刀の無分別なる使用を是認するか。答えて曰く、断じてしからず！ 武士道は刀の正当なる使用を大いに重んじたるごとく、その濫用を非としかつ憎んだ。場合を心得ずして刀を揮（ふる）った者は、卑怯者でありホラフキであった。重厚なる人は劍を用うべき正しき時を知り、しかしてかかる時はただ稀にのみ来る。

（著書より抜粋）

最後に、一流のアスリートは競技に使う道具には相当にこだわっているものですが、本物のサムライを志向するあなたもヒルマズ・・オクサズ、チャレンジしてもらいたいです。

初発心時辨成正學